

壇之浦合戦 (大野恵造)

彼は潮に逆らい 此は流れに順う

源軍 則ち 大いに 利あり

兵船 犇き 征箭 鳴る

赤旗を 染めて 斜陽 急なり

波浪は 敗れたる 九族を 弄び

海底は 幼竜の 座を 設う

桃花 春 尽きて 悉く 散り

花片 蟹と 化す 壇ノ浦

彼逆潮此順流 源軍則大有利
兵船犇征箭鳴 染赤旗斜陽急
波浪弄敗九族 海底設幼竜座
桃櫻春尽悉散 花片化蟹壇浦

解説 源平の壇ノ浦合戦を詠った詩。卷第十一「壇浦合戦の事」拉に「先帝御入水の事」に拠る。「源氏の船は三千余艘、平家の船は千余艘、壇ノ浦赤間ヶ関にて源平の矢合せとぞ定めける。」「二位殿幼帝を抱き参らせて波の底にぞ沈み給う」

語釈 ※壇ノ浦合戦||壇ノ浦(山口県下関市)で行われた戦闘。栄華を誇った平家が滅亡に至った最後の戦いである。※兵船||戦争に用いる船。いくさぶね。軍艦。
※犇||ひしめく。押し合ってさわぎたてる。※征箭||戦陣に用いる矢。※斜陽||西に傾いた太陽。※波浪||風が海面を吹くときに生じる風浪。※九族||高祖、曾祖、祖父、父、自分、子、孫、曾孫、玄孫の九代をいう。※幼竜||安徳天皇。※設||用意する。
※悉||あるもの全部。あるかぎり。

通釈 平家軍は潮に逆らい、源軍は潮の流れに従うことは、源軍大いに有利だ。両軍の兵船がひしめき、矢は無数に飛びまくる。赤旗を染める西に傾いた太陽が平家を照らし、戦いに敗れた平家軍の九族をも弄び、幼い安徳帝は二位尼に抱かれて海に沈んだ。春が過ぎ、桃花は散り、その花片は平家蟹となつて壇ノ浦に生息しているのである。